
光線

藍村 泰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光線

【Nコード】

N0979K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

現代家族もの。

ナイトパレードがもたらす光は真夏の夜の夢。全て幻想となってしまう。

目がチカチカする程に明るい原色を散りばめたアーチをくぐった。風船を持った着ぐるみが大袈裟な動作でこちらに会釈した。

えがわるり
潁川瑠璃は、眩い真夏の太陽と遊園地の煌びやかな雰囲気^{えがわるり}に吞まれて一步後退した。こうして遊園地に来るのは大して久しぶりのことでもない。友人達と中学卒業祝いに遊園地へ行ったのは記憶に新しい。

それでも異様なプレッシャーを感じるのは、今回一緒に来ている者達が、通常ならば有り得ない者達だからだろう。

「どうしたの？ 瑠璃、早く来なさいよ」

弾んだ声で瑠璃に呼びかけてきたのは母親だった。数メートル先からこちらに向かつて声をかけてくる。白髪混じりであつた母親の髪は、綺麗に根元まで染められており、栗色に照り輝いている。

普段、むつつりと老眼鏡を通して新聞にかじりついている父親も、今日ばかりは母親の隣で淡く笑っていた。彼はずっと笑っていた方がいいと思う。そうすれば、目尻が下がり、柔和に見えなくもない。瑠璃は自分の横に行く、五つ上の兄である琥珀^{こはく}の反応を窺った。

長い前髪の下にある顔は、何とも言えない表情をしている。琥珀も瑠璃と同様に、両親の異常なまでの機嫌の良さを訝しがっているように見える。

大体、日曜日だからといって家族全員で遊園地に行くなど、瑠璃の家族には全く以て無縁のことである。一昔前の家庭がそうだったように、瑠璃の父親は家庭に関しても子供に関してもノータッチだったし、母親もそれを甘んじて受け入れていた。琥珀は大学三年生という、就職活動とバイトに忙しい時期に突入しており、近頃では滅多に口も聞けなかった。瑠璃自身も高校受験から解放された嬉しさにかまけて新たに出来た友人と遊び呆けていた。要するに、それぞれ四人共、自分のテリトリー内で行動し、互いに干渉することは

なかった。

そのはずである。なのに、今現在四人がいるのは、日曜日の遊園地である。仲良しこよし家族が訪れる、典型的な場所と言っている場所である。

（信じられない）

瑠璃は心の中で何度目か知れない溜め息を吐いた。何が嬉しくて、日曜日に家族と遊園地などに来なくてはならないのだろう。普通ならば、彼氏や友人と来るべき場所だと瑠璃の矜持は告げる。しかし、嘆かわしいことに瑠璃には彼氏がいないため、ここは必然的に友人と来るべき場所と限定される。

余程暗い顔をしていたのだろう。琥珀が瑠璃の背中を優しく叩いた。彼にしては気持ち悪いくらい優しい動作である。幼い頃からいびられてきた瑠璃としては、むせび泣きそうになる。いつもこんな風に優しくしたら、彼女の一人や二人簡単に作れるのに勿体ないと強く思った。

「ここで立ち止まっていたら、他の客の邪魔になるな。行こうぜ」
今日程、自分の兄が傍にいて安心したことはない。両親はどこかのネジが飛んだかのように、遊園地の地図を見ながら、「このアトラクションに行きたい」、「その前にアイスだ。いや、フロートでもいいな」と騒いでいる。その中で琥珀は正常の範囲に分類される。「お兄ちゃん、今日のお父さんとお母さんおかしくない？ 暑さに当たったのかな？」

何気に辛辣な言葉を放つ瑠璃へ視線を向けて、琥珀は力なく微笑んだ。その微笑は、いつも大胆不敵な彼には似つかわしくない、困ったような翳りを持つものだった。

「今日くらいは、はしゃがせてやれよ」

瑠璃は素直に頷いた。これ以上追及しない方がいいと何となくだを感じる。

瑠璃と琥珀が喋っている間に、どうやって遊園地を攻略するか決まってしまったらしい。立ち止まっていた両親の足が揃って動き出

す。もう腹をくくるしかない。瑠璃は楽しそうに手を繋いでソフトクリームを交互に舐める恋人達を今にも呪わんばかりの目付きで見つつ、両親を追った。

メルヘンなコーヒークップにメリーゴーランド、スリル満点のゴンドラ。様々な乗り物がひしめいている。

瑠璃はぐるりと辺り一帯を眺望した。パステルカラーで統一された乗り物は、目に優しい。入り口のアーチとはえらい違いである。げんなりといった表情を隠そうともしない琥珀が、ポケットに手を突っ込んで前屈みになって歩く姿は、様になり過ぎていた。行き交う人々の視線は琥珀に集中している。我が兄ながら、何て目立つ人なのだろう、と半ば呆れた目で彼を見やる。

「あー、人混みウザい」

と当の本人は呟いているが、それはポーズなどではなく、心底思っているのがありありと見て取れる。

「だったら、来なきや良かったじゃん」

「それを言うならお前もな」

厭味を言ったら、すぐに切り返されてしまった。さすが琥珀である。長年苛め抜かれてきた瑠璃は口を噤む。小さな頃から兄であるはずの琥珀は瑠璃に対して酷い態度ばかり取ってきた。近頃になってやっと大人になったのか、横暴さが飛散したのは嬉しいことこの上ない。これからも、瑠璃が生きてきた中で嬉しかったこと歴代一位の座に在り続けることだろう。しかし、瑠璃と琥珀が仲の良い兄妹になるには後少し早い変化が必要だった。思春期に入った二人は、ろくに会話も交わさなかったのだから。

はしゃぎまくるいい大人二人と、沈みきったその子供二人は、対照的な雰囲気を纏っていた。

「もう、お父さん無理し過ぎ！」

父親は瑠璃の非難に答えることも出来ず、気分が悪そうに蹲っている。四人は父親推薦のジェットコースターに乗ったのだが、推した本人が酔ってしまった。これこそ本末転倒というものである。

瑠璃は付近に休憩出来るベンチがないかと首を回すが、どこもカ
ツプルが占領している。二人きりの世界に浸りたいのなら、公園
かどこかに行けばいいのだ。遊園地は遊ぶところだ。ベンチで長時
間会話するところではない。苛立ちを抑えるよう努力している瑠璃
の隣で母親は眉をハの字に曲げ、おろおろしている。こういう時の
頼みの綱と言える琥珀は、薄情にもトイレに行っている。瑠璃は膨
れ面で父親の背中をさすっていた。さすりながら、こんなに父親の
背中は小さかっただろうかと考えていた。

「瑠璃！ あっちにすげえ旨そうなのがあるぜ。父さん達も行こう」
やっとトイレから帰ってきたと思ったら、輝きに満ちた目で琥珀
は言い放った。そのまま強引に瑠璃の手を引く。

「ちよっとお兄ちゃん。お父さん気分が悪いって……」

「そんなの飯食ったら治るって。あれ絶対旨い。匂いからして旨そ
うだった」

瑠璃の制止を物ともせず、琥珀は瑠璃を引きずっていく。やはり、
元来の性格は変わらないものらしい。琥珀は何かに意識を奪われる
と、周りが全く見えなくなる。それは瑠璃にもある性分なので、あ
まり強く注意出来ないのが悔しい。両親は、そんな二人の様子を止
めようとはせずに見守っていた。

琥珀の言うとおり、その食べ物美味しかった。父親の気分も治
ったくらいだ。

“ソーせいじはんばーがー”と真っ青なペンキで書き殴られた看
板が、ワゴン車に立て掛けてある。簡素に見えるが繁盛しているよ
うで、長蛇の列が出来ている。昼時の今が稼ぎ時だからか、店員だ
ろう若い女が声を張り上げて“ソーせいじはんばーがー”の宣伝を
している。

とにかくこのソーセイジハンバーガー、見た目以上に味が良かつ
た。中にソーセイジが挟んであるだけのラフな食べ物に見えて、実
は違う。レタスとソーセイジの風味と味を生かす独特のソースがよ
く絡んでいて、歯触りも最高だった。いつもはそんなに食べない瑠

璃も、あまりの美味しさにすっかり虜となり、現在三つ目を咀嚼中だ。両親も琥珀も、無言のまま黙々とソーセージハンバーガーを平らげている。

瑠璃は自然と笑みが零れた。こうして一緒の時間を共有してみると、案外家族もいいものだ。

「そうだ！ 写メ撮ろう！」

いきなりの瑠璃の提案に、家族の目が点になった。

「今日の記念に、私が撮ってあげる。どうせ、お父さんのことだから、カメラ持ってきてないでしょ？ ほらほら、三人共もう少し寄って」

瑠璃は弾む声でバッグから携帯を取り出した。この半日で家族の中は急激に良くなっている。このまま行けば、普通の家族——いや、それ以上に仲の良い家族になるのも夢ではない。いつの頃からか疎ましくなった家族が、こんなに温かいものだたと、やっと思い出した。思い出した記念を、ぜひ残しておきたい。

「いや、俺が撮るから……瑠璃が写れよ。父さんと母さんの間に入って」

「嫌だ。三人の写メを撮りたいのっ」

しばらく押し問答を繰り返していたが、瑠璃の粘り強さに琥珀が根負けして、渋々父親と母親の間に身を滑り込ませた。

撮れた写メの中の三人は、どこまでも引き攣った顔をしていた。

正直に白状すると、瑠璃はお化け屋敷だけには入りたくなかった。幽霊を信じているわけではない。決して、そのような非現実的なものを信じているわけではない。中学に上がるまで、夜に一人でトイレへ行くことに恐怖して、寝惚け眼の琥珀を護衛として引き連れて行っていたのは脳内から既にデリート済みなので、これはカウントしないでおく。

枝垂れ柳が生温い風にさざめいた。それだけで瑠璃は飛び上がり、琥珀の腕をむんずと掴んだ。掴まれた琥珀の方は迷惑そうに溜め息

を吐く。だが、瑠璃だつて必死なのだ。今も叫び声を上げてしまいうる。そうになるのを、唇を一文字に引き結ぶことでどうにか我慢している。

「出た——っ！」

そんな瑠璃の耳に、二つの雄叫びがステレオのように届いた。お化け屋敷は音が反射しやすい。どこから聞こえてきたのか知れないその雄叫びを耳にしたその瞬間、我慢の糸が切れて瑠璃も奇声を発してしまった。そしてこの世のものとは思えない自分の声に驚き、またもや絶叫した。

「……………馬鹿」

琥珀は肩を小刻みに震わせて瑠璃の奇行を笑っている。両親も同様だ。瑠璃はこの暗闇の中で顔を紅潮させたが、それに気付ける程の夜目を持つ者はいない。結局、お化け屋敷から出るまでずっと、家族は瑠璃に対して大笑いしていた。従業員の脅かしに動じる者は瑠璃を除いて誰もいなかった。

時間はすぐに過ぎていく。気付けば降り注いでいた太陽の光は和らぎ、空の色も蒼から橙に移ろう。

最後に観覧車に乗ることで意見が一致した瑠璃達は、当たり障りのない会話をしながら、順番を待っていた。高校の話、友達の話、勉強の話、それは全て瑠璃に関するものだったが、両親が交互に訊いてくるので、瑠璃は素直に答えた。訊かれて困る話題はない。彼氏の話題は黙殺したが、こうして自分を気にかけてもらえるのも嬉しかった。

そうこうしている内に、順番が回ってきた。瑠璃はすかさず両親の背中を押す。

「瑠璃っ？」

父親と母親の声が重なった。二人は驚愕した表情で窺い見ている。「折角なんだから、二人で乗って。私は怖いお兄ちゃんと一緒に乗るから」

「誰が怖いだつて？」

心外そうに眉をひそめて琥珀は瑠璃に抗議してきたが、それを無視して両親を観覧車に押し込む。その行動には従業員も狼狽していた。

瑠璃と琥珀は両親の次の観覧車に乗り込んだ。任務を果たした爽快感から気分は最高潮にいい。対して琥珀の顔色は悪かった。

「どうしたの、お兄ちゃん。具合悪い？ あ、もしかして高所恐怖症？」

「そうだったら観覧車に乗るわけないだろうが。よく考えろ」

瑠璃の発言に呆れ返ったのか、琥珀は額に手を当てて俯いた。観覧車はゆっくりと上昇して行く。穏やかな一日の終わりに相応しい。

「今日つてさ、お父さんとお母さんの結婚記念日だったよね」

それを口にした途端、琥珀が弾かれたように瑠璃を見た。

「憶えてたのか？」

「さっき思い出したの。だから、二人きりにしてあげたくて」

照れ隠しに笑顔を見せると、琥珀も優しく笑い返してくれた。

「きっと、父さんも母さんも、喜んでくれてるよ。言葉に出さないだけで」

瑠璃は頷き、両親の乗っているブースを覗いた。ちょうど瑠璃と琥珀が乗っているブースは頂点に来ていたので、両親が乗っているブースの中がよく見えた。彼らは無表情のまま、会話も交わさず外を眺め見ていた。瑠璃の心に一抹の不安が生じた。

沈みゆく夕陽が美しい。

「もう終わりだ」

出口付近に辿り着いた時、父親が静かに呟いた。

「あなた……」

「父さん、まだ……」

「それでも我慢したんだ。我ながらよく辛抱したと思うよ」

父親の言いたいことがわからない。瑠璃は泣きそうになっている母親と、父親の言動を止めようとしている琥珀を交互に見る。父親は瑠璃の方を向いた。重々しい口が開く。

「父さん！　せめて家に帰ってから！」

悲痛な声色で琥珀が訴えたが、父親は頑として聞き入れなかった。「お父さんはお母さんと違って隠し事が苦手でね。瑠璃に、もうこれ以上隠しておきたくないんだよ」

瑠璃の心が警鐘を鳴らした。父親の言葉を聞いてはいけないと第六感が告げる。瑠璃は知らず知らずに後ずさった。

「瑠璃、お父さんとお母さんは離婚するんだ。お前もどちらと一緒に暮らすかよく考えなさい。どちらを選んでも、お父さん達は受け入れる」

青天の霹靂。もうこれ以上ない程、打ちのめされた気分になる。立ち眩みが起きた時のように目の前が霞んだ。

「瑠璃！」

後ろから琥珀の切迫した呼び声が這ってきたが、それに構わず瑠璃はその場から逃げ出した。もうすっかり日の暮れた遊園地では、まもなくナイトパレードが始まるうとしていた。

昼間にソーセイジハンバーガーを食べた広場まで来た。ミュールを履いていたので、足のかかとの皮が剥けてひりひりする。噴水の近くにあるベンチに身を委ねた。瑠璃は自分が撮った、ぎこちない家族の写メールを見て、涙を一筋流した。瑠璃だけが、何も知らずに浮かれていた。あの様子だと、琥珀は全て知っていたのだろう。やるせない思いをどこにぶつけていいかわからず、瑠璃は携帯の画面を強く押した。このまま画面など割れてしまえと思った。

一時間はそうしていただろう。涙の跡はすっかり乾き、瑠璃はナイトパレードが美しい光と音楽を奏でながら客を楽しませているのを、ベンチに座ったまま見ていた。あの華やかな場所に近づく気力はない。瑠璃の心は混乱と落胆に満ちていた。瑠璃の他にも広場には人がいることにはいるが、誰もが誰かと一緒である。それは家族とだったり、恋人とだったり、友人とだったり。彼らは一様に、瑠璃を見て心配そうな顔を向けていた。

「あーあ、足痛いだろ」

突然後ろから声がしたかと思うと、隣に誰かが無遠慮に座つてきた。睨み付けると、その人物は琥珀だったので、全身から力が抜けた。枯れたはずの涙が零れそうになる。

「お兄ちゃん、邪魔だから帰って。私は一人でナイトパレードが見たいの」

琥珀は身動きせずに、遠くにあるナイトパレードを眩しそうに目を細めて見ていた。

「お前が光だった」

穏やかとも言える口調で、彼は告げた。

「あの家族の中で、お前が光だったんだよ、瑠璃。父さんも母さんも、俺だって、お前の笑顔見たさに今日ここに来たんだ。馬鹿みたいに屈託なくいつも笑っているお前がどちらを選ぼうが、今日の思い出を胸に生きて行こうと父さんも母さんも決意してたみたいだな。だから、あんなに仲良さそうな演技までして。馬鹿みたいだ」

「……………そんなの、全然知らなかった……………」

いや、気付くわけがないのだ。瑠璃は家族ではなく、友人との付き合いを重要視していたのだから、家庭でそんなことが起こっていることに気付くわけがない。

琥珀は瑠璃の頭を乱暴に撫でて、力強く言った。

「大丈夫。お前が選ばなかった方の親には俺がついていくから。そっちの方は任せろ」

それは、琥珀との別れを意味している。そのどこが大丈夫なのだろう。優しさは、時として鋭利なナイフとなる。

ナイトパレードがもたらす光は真夏の夜の夢。全て幻想となってしまうといい。

新学期が始まったかと思えば、瞬く間に季節は冬となった。暖房の効いた教室の窓ガラスは曇っている。外と中の温度差が激しい証拠だ。

瑠璃の名字は変わらなかった。経済的な理由もあり、彼女は父親についていくことになった。前よりも物静かになった瑠璃を、友人達は何とか励まそうとしてくれた。瑠璃は、その気持ちだけで十分だと感じる。心配してくれる人があるのは幸せなことだ。

今日は七限目までであったので、時刻は五時を迎えている。

「瑠璃、これからカラオケ行かない？ 一時間無料券が手に入つてさ」

「ごめん！ 今からお兄ちゃんと会っんだ。もう校門いると思うから……早く行ってあげないと、凍死しちゃう」

「そっか。うん、じゃあ今度行こうね！」

瑠璃は大きく頷き、友人達に手を振った。そして、急いで階段を駆け降りる。下駄箱に近付くにつれ、寒さが体の芯まで滑り込んできた。

門前には、やはり琥珀がいた。随分前からそこにいたのか、小さく足踏みしている。雪が降っていないのがせめてもの救いである。

「マジ寒い。耳千切れそう」

開口一番、琥珀はそう言った。確かに彼の耳は寒さによって真っ赤になっている。

「ごめんね。七限目まであった」

「はあ？ 七限目？ ……俺、二時間前からここでスタンバってたんだけど」

ぶつくさ言いながらも、琥珀は車に乗り込む。車の中で待っていれば良かったのではないかと思っただ、瑠璃は敢えてそれを言わなかった。

瑠璃と琥珀は、離れてからの方がより頻繁に会っている。

「で、今日突然呼び出したのは何で。何か買いたい物でもあったわけ？」

「あの遊園地に行きたくなつて」

琥珀が息を呑んだのがわかった。あれ以来、遊園地の話はしないことが、二人の中で暗黙のルールとなっていたからだ。

「わかった」

端的に答えて、琥珀は車を出した。

二人の足は、何も言わずともあの観覧車に向かっていた。冬の夕暮れは早い。遊園地は瑠璃達が入った時にはもうライトアップされていた。従業員に促されるまま、観覧車に乗った。

地上が遥か下に見える程、高度が上がった時、ふいに琥珀が一つの秘密を明かした。

「離婚の原因作ったの、俺なんだ」

彼の告白に、瑠璃は心臓を抉られたような感覚を味わった。心拍数が尋常ではないくらいに跳ね上がる。

「去年の五月頃かな。俺が大学から帰ったら母さんがさ、男とリビングで仲良さそうに話してて。それを馬鹿なことに俺は父さんに言っちゃったわけ。その男、父さんの友達か何かだと思って何気なく父さんに言ったら、何と母さんの浮気相手だった」

琥珀は頂垂れ、それから何も言わなくなった。その姿はまるで、瑠璃に自分を責めるとも言っているようだった。ここで琥珀は悪くないと言っても、彼は納得しないと思った瑠璃は黙っていた。必死に泣くまいとしている琥珀の代わりに、泣きじゃくった。琥珀は困った様子で瑠璃の頭を撫で続けた。

観覧車が頂上付近まで上がった。いきなりライトが消え、観覧車の動きも止まる。

「停電？」

「かもな……」

二人は揃って窓から下を見た。数秒後、目を覆う程に凄まじい光のつぶてがそこかしこに上がった。色とりどりの光を見ていた瑠璃の胸に、ある記憶が去来する。

『きれいだね』

『うん、またこれ見に来たい』

まだ小さい琥珀が瑠璃の言葉にしきりに頷いている。そんな二人

を見て、母親は笑った。

『これはね、サプライズなのよ』

『サプライズ？』

『びっくりさせるってことだ。だから、いつあるのかは遊園地のオーナーしか知らない』

瑠璃の問いに答えたのは父親だった。彼も満面の笑顔でサプライズを楽しんでいる。

『お父さんでもわからない？』

琥珀の真剣な顔に、父親と母親は顔を見合わせて微笑み、頷いた。

『ああ、こればかりはね。でも、今日の思い出は一生ものだ』
遠い記憶が、その光に反射して蘇る。

「オーナー、今回もお客さん達喜んでくれてますよ」

従業員の嬉しそうな声に、オーナーは荷物を整理していた手を休めて笑顔を見せた。

「そうか。それは良かった。赤字覚悟でやる甲斐もあるってものだ」

「もう、ほんつとくに綺麗ですね！ 初めて見た時は感動して泣きました」

オーナーは、今も涙目じゃないか、と突っ込んでやろうかと思っただ、あまりに純粹な目でサプライズを見ている従業員を見ていたら、毒気を抜かれた。

「……………思い出は何かの拍子に蘇る。手遅れになる前に、思い出した方がいい思い出も多いんだ。これは、微弱ながら、俺からお客さんへのプレゼントだよ。この伝統だけは今後何があるかと潰さない。昔、俺もここで思い出もらったからな」

「大切な何かを、この場にいるお客さん達が得られたらいいなあ」

「失って初めて気付く大切なものもあるけどね」

「あ、感動ぶち壊さないで下さい！ ったく、オーナーはいつもこうだ」

「ははっ、悪いな。性分だ」

あの時泣いていた瑠璃も、今や二十三だ。彼女は半年後に結婚する。自分と二人でこの遊園地に来た冬の日に結婚する気らしい。そんなに苛め抜いた自分を慕ってくれる瑠璃が、可愛くて仕方がない。何かあつたら必ず助けてやろうと決意している。

若過ぎるオーナーだとよく言われる琥珀は、自らの過去を振り返りながら光を見つめていた。これからも上がり続ける、光のつぶてを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0979k/>

光線

2010年10月8日15時23分発行